

小説を書くようになって、文献・資料を集める調査作業と平行し、取材にできる機会が多くなった。

最近ではネット検索により、一次情報の文献検索がパソコンで手軽にできる。だが、集めた資料やネット情報で満足できなくなると、描きたい人物が生き舞台を、実際に自分の眼で確かめるために現地に赴いてから執筆するようにしている。

高校時代の友人から誘われて、取材先と一緒に歩きモティーフを新たに膨らませたこともある。取材先から思わぬ紹介を得て、現地に行ってみることも少なくない。短編なら取材せず空想を膨らませてまとめることも可能なのだが、長編はそうは行かない。執筆する際は、綿密な資料集めとこつした取材活動を再構成する作業が必須となる。

六月一日(金) 渋谷BUKAMURAオーチャードホール最上の三階席、私は家内と二人でいた。

目的は、ザ・チーフタンズの東京公演を聴くためである。座員の一人トリナ・マーシャル嬢のアイリッシュハーブを聴くためである。

女性は、拙著「奇妙な〜」シリーズの第六弾「奇妙な失踪者」(650枚)の登場人物、琵琶奏者のマックラン星、そのモデルとなったトーマス・マーシャル(芸名蘭城)氏の妹さんなのである。

ケンブリッジ大の元パイプオルガン奏者だった蘭城氏が、英国のエリートコースを投げ出して、日本の琵琶奏者に何故成ったのか?何故日本の伝統文化の琵琶に惹かれたか?そして天蚕の絃に何故固執したのか?は本に譲りたい。氏のインタビュ取材は昨年秋、群馬県藤岡の喫茶店だったが、その際は来年六月来日すると教えてくれた。

その時は、トーマス蘭城氏は、愛蘭の音楽一家に育ったのだらう位にしか思わなかった。インタビュ取材の場合、便利な小型のICレ

コーダーを何時も持参し、インタビュアに許可を得て録音させてもらう。会社勤めの時代は仕事で客と面談しても、簡単な手帖メモ書きだけで、会社に戻ってから記憶を頼りに報告が書けた。今や加齢による記憶力の衰えはどうしようもなく、ICレコーダーに頼ることにしている。

妹さんは日本・愛蘭外交樹立五十周年記念行事の一環として、ザ・チーフタンズのメンバーのハーブ奏者として来日。一行はアイリッシュダンスと演奏の、リアダン(Riadan)という女性のみのバンド六名、キイボード、ステップ・ダンスを踊るキャラ&ピラツキ兄弟、総勢十数名編成である。

日本人共演者に、和太鼓奏者として海外公演も豊富な林英哲、奄美大島出身で節回しに特徴のある元ちとせが加わるといふ豪華な顔ぶれである。

ザ・チーフタンズ(The Chieftains)というバンドが、国際的な愛蘭のバンドであること、妹さんが2003年からそのバンドのハーブ専属奏者であること、琵琶奏者トーマス蘭城氏を取材するまでは、私は全く愛蘭情報に疎かった。

バンドは、ケルト民族の流れを汲み、愛蘭・トラッド・フォークの創始者的な存在だと音楽評論家の評価は高い。一年の大半を世界ツアーに費やし、四十枚以上のアルバムを発表。グラミー賞六回、アカデミー賞受賞、六二年結成、今年で四十五周年を迎え、愛蘭の切手にもなった国宝級のバンドで、政府から公式音楽大使に任命されている。来日公演は、六年振り二回目であるという。

そんな民族音楽を奏でる人気バンドとは露知らず、チケットは簡単に手に入るだらうとたかを括った。東京での公演は人気沸騰し、二回あるようだが幸い初日公演のチケットをやっと手にいれた。バンドはその後全国七会場を廻るといふ。

公演全席指定一枚七・八千円。決して安いチケットではない。一ヶ月前の申込で、入手できたのはホール最上階の三階席で、天井敷だった。

開演は十九時だったが、少し遅れて始まった。天井敷敷から見下ろすような愛蘭ミュージックの

真髓、歌有り、ダンスあり、笑いありの正に興奮の増地である。ステージ全面の特別の床を蹴るダンスは凄かった。熱狂して皆手拍子を打つ。男性の珍しい楽器(uilleann piper, tin whistle)、

タンギングを連続させるフルートの熱演、一番後方でバンドのリズムを支える打楽器(boogie)に加わる日本の和太鼓奏者の腹を揺るがす音が、会場を一挙に押し包む。時に哀愁を込めた静寂、ハーブとフィドル(fiddle)、そして笛の共演。一見ステージ上の叔父さん叔母さんしか見えない彼らに、楽器を手にした途端愛蘭魂が乗移っていた。

ザ・チーフタンズと初コラボ、元ちとせの抑揚の効いた歌声が会場に響く。過去ザ・チーフタンズと共演したミュージシャンは、ポール・マッカトニー、ヴァン・モリソン、ローリング・ストーンズ等で錚々たる顔ぶれ。日本人としてはセツション初、元ちとせがダブリンのウインドミルレーン探録の「SUNNARUN(シユールル)」は、耳新しく正に奄美の島唄と愛蘭伝統民謡曲の見事な出会いを堪能。伴奏に、元ちとせのデビュー当時から楽曲を提供したという、ギターリストが加わる。

家内は、片時も双眼鏡を手放さなかった。最後は凄かった。ステップダンスの三人が、ステージから降りて会場内の観客を誘い、手をつなぎ踊りの輪が次第に広がっていく。一体化した群舞が会場を廻り、今度はステージに駆け登っていく。演奏者と観客が一体になって舞台上は、正に日本・愛蘭親善の輪が開いていたのである。

休憩時間ビッグフェに、沢山愛蘭人が屯していた。彼らは、久し振りに日本で望郷の音色を感じたのである。私も黒いギネスビールを飲んだ。後日自宅のネット検索で、映画「タイタニック」の哀愁を帯びた独特の笛の音や船倉パーティーの曲が、アイリッシュサウンドであると知った。